

恋愛関係における葛藤場面で問題言及することへの意味づけ

— 青年期女子のジェンダー意識と相手との関係性に対する効力感に着目して —

稲 富 理 紗

問題と目的

現在、カップル間の葛藤やズレ、日ごろの関わり合いといったコミュニケーションの問題が検討されるべき主要なテーマである(多川,2005)とされている。また、青年にとって恋愛は、大きな関心ごとであると共に、悩みの源泉でもあり、重要な対人関係の一つである(松井,1990)。

東海林(2009)は、対人関係において葛藤は不可避であり、その対処の仕方に関係の継続や質が左右されると述べている。古村・戸田(2008)は、葛藤場面で対話により建設的に対処した場合、関係がポジティブに変化したと認知させ、コミットメントを高めることを明らかにしている。また、関係効力感是对人関係におけるパートナーとの関係の質を規定する要因となり(和田,2001)、相手との相互作用の頻度を促進させることを明らかにしている(浅野,2009)。一方、東海林(2006)は、葛藤場面において対処方略として主張することは、相手が情緒的に不快になる可能性もあり、リスクがあると述べている。

自身の主張を通すことと関連して、アサーションという概念がある。アサーションとジェンダーとの関連性に着目した研究では、男女共にジェンダーの縛りゆえに自分らしい自己表現がしづらいといった結果が明らかにされている(園田,2003)。

以上のことから、親しい間柄において望ましい葛藤方略とされている主張的対処や問題に積極的に取り組もうとする際、ジェンダー意識の高い人は、その対処についてネガティブな意味づけをしやすく、その意味づけが対処方略に影響を及ぼし、相手との関係性に対する効力感に影響を及ぼしていることが予想される。

先行研究を概観すると、夫婦関係においては、自身の行った対処方略について内的過程を含めた検討が行われているが、恋愛関係においては、自身の行った対処方略の意味づけを検討した研究やジェンダー意識を要因とした研究は見当たらない。

そこで、本研究では「対話をすることで相手と

の対人葛藤に向き合い、問題に踏み込もうと試みること」を問題言及と定義し、恋愛関係にある二者の葛藤場面において、青年期女子のジェンダー意識が問題言及することへの意味づけにどのように影響し、さらにその後の問題言及行動と相手との関係性に対する効力感にいかに関与するかを明らかにすることを目的とする。本研究ではFigure1に示したモデルを想定し、検討を行う。

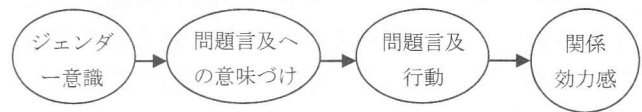


Figure1 仮説モデル

方法

予備調査

本調査に先立って、恋人との葛藤場面で問題言及することへの意味づけに関する項目を設定するにあたり、先行研究に該当する尺度がなかったため、予備調査を実施した。

本調査

調査対象者 大学生550名を対象とし、416名の回答が得られた(回収率75.64%)。そのうち、恋人のいる女性95名。最終的に、回答に不備のあった2名を除いた93名を分析の対象とした。

調査期間 2012年10月下旬から11月初旬

調査方法 質問紙調査法

手続き 講義終了時に調査の目的と研究協力は任意であることなどの説明を紙面および口頭で行い、研究協力者の同意を得たうえで質問紙を配付した。また、県外の大学は郵送にて質問紙を配付し、紙面にて説明を行った。

回収方法 講義終了時の休み時間に研究者が直接回収を行った。また、県外の大学に関しては返信用封筒を用意し、郵送にて回収を行った。

質問紙の構成

①フェイスシート

②ジェンダー意識尺度(24項目)

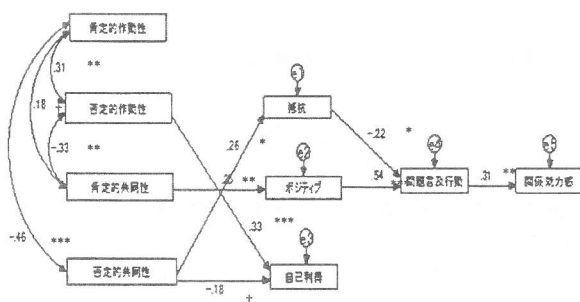
- ③親しい間柄の人物の想定を求める設問
- ④相手との関係性に対する効力感尺度（9項目）
- ⑤親しい相手との葛藤場面の深刻さを問う設問
- ⑥葛藤方略尺度（36項目）
- ⑦予備調査を基に作成した、問題言及への意味づけ尺度（17項目）

それぞれ、5件法で回答を求めた。

結果

因子分析及び主成分分析 各尺度の因子分析及び主成分分析を行った結果、「肯定的作動性（ $\alpha=.75$ ）」「肯定的共同性（ $\alpha=.67$ ）」「否定的作動性（ $\alpha=.77$ ）」「否定的共同性」（ $\alpha=.68$ ）」「関係効力感（ $\alpha=.86$ ）」「問題言及（ $\alpha=.74$ ）」「脅威（ $\alpha=.76$ ）」「攻撃（ $\alpha=.77$ ）」「譲歩・回避（ $\alpha=.67$ ）」「なだめ（ $\alpha=.67$ ）」「抵抗（ $\alpha=.76$ ）」「ポジティブ（ $\alpha=.72$ ）」「自己利得（ $\alpha=.76$ ）」の13個の変数が抽出された。これらの因子から「肯定的作動性」「肯定的共同性」「否定的作動性」「否定的共同性」「関係効力感」「問題言及」「抵抗」「ポジティブ」「自己利得」の9つの変数を用いて共分散構造分析を行った。

仮説モデルの検証 9つの変数を仮説モデルに適合し、検討を行った。結果はFigure2に示す。適合度指標は、GFI=.95, AGFI=.83, CFI=.90と適合性は許容できるものであった。



注) *** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$, † : $p < .10$

Figure2 最終的に構成されたモデル

最終的に構成されたモデルより、「否定的作動性」から「自己利得」,「肯定的共同性」から「ポジティブ」,「否定的共同性」から「抵抗」に正のパス,「否定的共同性」から「抵抗」,「否定的共同性」から「自己利得」は負のパスが得られた。また,「ポジティブ」から「問題言及行動」へ正のパス,「抵抗」から「問題言及行動」へは負のパスが得られた。「問題言及行動」から「関係効

力感」は正のパスが得られた。

考察

仮説モデルを検証した結果、最終的に採択されたモデルは仮説モデルを支持するモデルであった。自身のジェンダー意識を否定的な女性性であると認知した場合、問題言及することに対して、抵抗を感じやすく、問題言及行動は抑制され、相手との関係性に対する効力感は低くなることが示唆された。藤田（1993）は、女性に生まれたことを肯定的に感じながらも、社会的な側面や対人関係の側面を考えると、女性性を否定的に捉える女性は少なくはないことを示しており、本研究においても少なからずその影響があると考えられる。このことから、自身を否定的な女性性であると認知した場合、対人関係場面においては弱い立場であることを意識づけられ、問題言及行動に対して「抵抗がある」と意味づけやすいことが考えられる。一方で、自身のジェンダー意識を肯定的な女性性であると認知した場合、問題言及することに対してポジティブな意味づけをしやすく、問題言及行動は促進され、関係効力感は高くなることが示唆された。土肥・廣川（2004）は、肯定的な女性性は、肯定的な男性性が緩和効果となって否定的な女性性が抑制されていることを明らかにしている。このことから、肯定的な女性性は、葛藤場面において問題言及することに対してポジティブな意味づけをしやすく、問題言及行動を用いやすいことが考えられる。本研究において問題言及の意味づけと問題言及行動及び関係効力感に影響を与える要因としてジェンダー意識という視点が明らかにされた。この結果は、社会や家庭の中でみられるジェンダーの縛りが対人関係の一つである恋愛関係の中でも存在していることを示唆するものとなった。

また、これまで恋愛関係においては、自身の行った対処方略の意味づけを検討した研究やジェンダー意識を要因としたものは明らかにされていなかった。本研究によって恋愛関係における葛藤場面において、自身のジェンダー意識が問題言及することへの意味づけに影響を及ぼし、問題言及への意味づけから問題言及行動へと影響を及ぼし、さらに相手との関係性に対する効力感に影響を及ぼすといった一連の因果関係が明らかとなった。